手屋體前の手水鉢を倒して腰をかけ、弓を肩にかけて極る。高綱は正面となり「オヽ萬夫不當の大丈夫、早打立てん」と右足を踏出し、左手を頭上にかざして勵す。時姫は暫くのうと出て、三浦之助にとりつき別れて惜しむ、「緣の切目は蘭奢の薫」で、三浦之助はよろめきうつ伏せに倒れる。その間下手で後向けとなつてゐた高綱が左に雜兵の鎧を結び付けた鎗（小道具圖解參照）を左に持つて正面となつて、三浦之助を見下すと「無常の聲や鯨波」で、鉦と太鼓をきかし高綱は三浦之助の後へまはつて抱きかゝへるやうにしてグツと活を入れると、三浦之助は立上つてよろめいて上手の高綱に衝當らうとするので、軍扇でその胸をトンと打ち、「跡に見捨てゝ」で、立上り黑地に日の丸の軍扇（小道具圖解參照）をサツと開いて胸にかざし、左の鎗をかゝげて、首を下手へまはしツケを打たせて極り、三浦之助下手むき、蹲つて、弓を肩にさゝへて首を垂れ、時姫は上手むき、兩手を後帶へまはす形で三人畫面の見得にて幕。

（十五日目見物）

淨曲中の後白河法皇

毎年、陽春四月十三日（正しくは三月十三日）京都下寺町六條なる長講堂に、御開基　後白河法皇忌が嚴修される。本年も七百五十一年の御祥忌が修行され、併せて西山專門學校教授森美純師の法皇讃仰の講話があつた。

×

「義經千本櫻」は平家沒落の哀詩であり、「平家女護嶋」は平家榮華の繪卷である。その後者の第四に、清盛が嚴島御參詣と稱して、密かに　後白河法皇を害し奉らうとする件がある。一たん海中に沈ませられた玉體を海士千鳥が飛入つて救ひまゐらせ俊寛の下人有王が肩に負ひ奉つて危害から逃れる。清盛のこの無道ぶりに對する天罰として彼は奇病に命を終るのである。

×

「源平布引瀧」の初段には　後白河天皇が禁裡守護の木曾ノ先生義賢へ兄義朝所持の白旗を密かに賜はる。それと察した清盛が詮議の爲に御座へ近づくが、逆鱗に眼くるめいて階下へ轉げ落ちる件がある。なほ四段目は配所鳥羽の離宮の場面である。

×

「三十三間堂棟木由來」の白川の法皇は實に　後白河法皇の御事であつて、三十三間堂は即ち御惱平癒御祈願の爲の御建立である。

×

長講堂には　後白河法皇の尊像（國寶）が御影堂に安置せられてあり、勅封御自畫之宸影、宸翰六字名號等數多の御遺品が當寺什寶として秘藏されてある。京都人でもそれを知る人の尠いのと、知つても參詣する人の稀なのは遺憾である。

（森　ほのほ）